鎌倉街道と古墳の森の たぬき のおはなし

明治時代か大正時代のころ、鎌倉街道の近くで「あぶら屋」をしていたおばあさんがいました。その家によくたぬきが遊びに来たそうです。あぶら屋とは、生活で使うあぶらをしぼり、売っているお店のことです。まだ毛呂山では電気が通っていなかった時代なので、あぶらはだいじな灯りの燃料でした。

ある寒い冬の夜、「あぶら屋」のおばあさんは石うすをつかって粉をひいていました。畑でとれた麦を粉にして、うどんをつくろうと思っていたのです。すると

「あぶら屋さん」、こんばんは

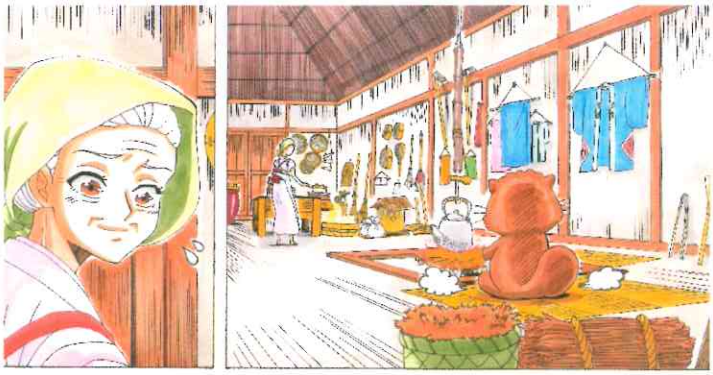
「あぶら屋さん」、こんばんは

と何度か声がしました。こんな夜ふけにだれだろう、とふりかえるとたぬきが障子を開けて入ってきたのです。

おばあさんはびっくりして声も出せず、ポカンとして、たぬきが入ってくるのを見ていました。たぬきは

どっこいしょ・・・

と、まるで人間のように歩いて、土間のいろりの向こうがわにあぐらをかいてすわり、あたたまりはじめました。



粉ひきを終えて、おばあさんがあとしまつを始めると、

カラリ

と障子を開ける音がして、たぬきが静かに帰っていきました。

おばあさんは

やれやれ、化けだぬきが悪さしなくてたすかったわい

それにしても家の中に入るとは、たぬきもよっぽど寒かったんだんべ・・・

とちょっとかわいそうに思いました。

それからたぬきは、たびたびあらわれ、おばあさんもだんだんになれてきて、だまっていろりにあたらせていました。このころはたぬきも人を化かすといわれ、こわがられていましたが、おばあさんは化けだぬきにも優しかったので、たぬきもいたずらしなかったのですね。

このたぬきは、ここらへんにすむ化けだぬきにちがいねえ。

大きな声を出したら、あばれるかもしんねえな。

ここはおいはらわないで、そっとしといてやんべえ・・・

そう思ったおばあさんは、できるだけいつもどおり、粉をひきつづけました。

ガラガラ　ガラガラ　ガラガラ　ガラガラ

おばあさんもたぬきも一言もしゃべらないので、石うすの音だけがひびいていました。ときどきいろりのまきが、パチッとはじける音がしていました。

※このお話は『毛呂山民俗誌』に掲載されている地域の人のお話をもとに制作しました
※本紙の挿絵と文は著作権で保護されていますので無断転載・転用できません
挿絵：中村郁恵作画　制作：毛呂山町歴史民俗資料館
住所：埼玉県入間郡毛呂山町大類 535-1 電話：049-295-8282